

学位論文審査の要旨

		要 旨
学位申請者	大口（大森） 美佐 【人間発達科学専攻 平成25年度生】	日本では1990年代以降、長期的な少子化傾向を背景として若者の結婚難及び恋愛離れが問題視され、若者たちはなぜ恋愛しないのかが問われるようになった。しかし、若者たちは決して恋愛や結婚を忌避しているわけではない。本論文では、調査対象を首都圏在住の高学歴・正規雇用者の20歳代男女に絞り、かれらの恋愛への意味づけと恋愛をめぐるコミュニケーションのありようから、若者たちはいかに恋愛しているのかを探ることを目的とした。分析資料は、5グループに編成された22名の男女によるフォーカス・グループ・ディスカッション(FGD)、そしてこのFGDへの参加メンバーの内12名に対する半構造化インタビューにより得た。
論文題目	現代日本の若者はいかに「恋愛」しているのか —首都圏の高学歴・正規雇用者の場合—	本論文の主要な知見及び意義として、次の3点が挙げられる。第1に、調査対象者たちの「告白」から「付き合う」関係への展開や「別れ」の局面において、失敗や傷つくことを避ける合理的でリスク回避的なコミュニケーションがみられ、そこではICTの機能が存分に活用されていた。第2に、恋愛と性の関連に注目すると、「付き合う」という関係は性的な排他性をもつ制度的な関係だとみなされ、また、男女ともに性関係のイニシアティブや関係維持には男性の責任がより重いと認識されていた。それゆえ、その責任の引き受けを回避するため、性関係それ自体を避ける、あるいは双方とも了解済みのセックスフレンドという意味づけを与えるなどの方法が採られていた。第3に、男女ともに結婚年齢を意識するようになると、「恋愛のための恋愛」から「結婚のための恋愛」へと恋愛の意味づけが大きく書き換えられる。かれらにとって結婚は、出産・子育てと分かちがたく結びついており、出産の期限が意識されると、リスク回避のために恋愛市場から遠ざかっていたものが再び回帰してくる様子もみられ、そこには階層的再生産のメカニズムが埋め込まれていた。
審査委員	(主査) 教授 藤崎 宏子	
	教授 坂本 佳鶴恵	
	教授 杉野 勇	
	教授 小玉 亮子	
	准教授 青木 紀久代	本論文の審査会は、平成29年11月8日、平成30年1月9日、2月19日、2月28日の4回にわたりおこなわれた。第1回審査会では、上記のような本論文の意義は評価されたものの、①主要概念と概念間の関係の未整理、②語りの一面的な解釈の問題性、③調査対象者の階層性を考慮した分析の不十分さ、④文章の推敲不足、⑤結論における議論展開の不足、などの問題点が指摘された。これらのコメントを受けて修正作業をおこない、その後2回の審査会で修正状況を確認し、平成30年2月28日の公開審査会に臨んだ。公開審査会における論文の概要報告及びその後の質疑応答はおおむね満足のいく水準であった。このため、引き続きおこなわれた最終審査会では、全会一致で本論文は博士學位論文として合格水準に達しているとの結論に至った。 以上のことから本審査委員会では、本論文を博士(社会科学)、Ph.D.in Family and Gender Studiesの学位を授与するにふさわしいと判断した。
インターネット公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否（可・否）</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <p>ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</p> <p>イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p>ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p>エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</p> <p>オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> <p>※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	